

文学賞をいただいて

松永ひろし

今から44年前の1975年、準商業誌「少年少女の雑誌『とうげの旗』」を1万部近く発行していた信州児童文学会は、「とうげの旗」に新風を送ることを目的に、たとえ超長編であってもいつさい掲載料を徴収しない同人誌「旗に風」を創刊しました。高田充也さんが初代編集長のこの同人誌、門戸が広くてとつてもうれしかった思いがあります。

さて、俚言？あるいは伝承だったでしょうか、「赤い雪が降ると雪女は消える」——この言葉を見たとのおぼろな記憶だけ無謀にも私は件の「旗に風」の9号（1979年）に雪女物語「ゆき」の連載を始めました。しかしながら物語の筋立てを決めずに勢いだけで書き始めたものでしたから、5年後の1983年に「第六章 ゆきの秘密②」をもつて当然のように頓挫しました。表向きの言い訳は勤

めるデザイン会社で編集の仕事が忙しくなったとかなんとか……。
その「ゆき」の続きを、本文の読みやすさから「ユキ」とカタカナに変え、34年後の2017年秋に書き出したのは、道楽の花の撮影が少ない時期であり、かぎりなくヒマだったからです。さらには「とうげの旗別冊『宮下和男追悼』」が仕上がつた後も、とうげの旗掲載作品の選考を北沢彰利さんに委ねていたので、編集長をしている身であっても大手を振つて投稿できる状況だったことも続きに取り組む意欲を後押ししました。

物語の核心ともいえる「赤い雪が降る場面」は連載を開始した時すでに脳裏にありました。「続きを書く」ことはそのままの「赤い雪が降る場面を書く」ことでしたから、「やあ、ついにこの時が来たぞ！」的な心の昂ぶりの中でパソコンのキーボードをたたくと、なぜかストーリーがどんどん先につながっていました。そして翌18年の春、それなりの形になりました。

それからしばらく日が経つて、北沢さんから19号

に載せる作品が少ないと聞かされた私は、「長編が手元にあるけれど送つていい？」とたずねました。そして了解をもらいました。すると前後して、北沢さんの元に原田康法さんから「ウルマスの黒人形」が届いたのです。「ウルマスの黒人形」は119枚の長編だといた私は、ウルマスだけで十分に「束がでる（厚くなる）」から、「ユキ」を次号に回そうかとも考えました。が、編集のため私の手元に届いた原田さんの作品を読んだとき、ウルマスとユキは同じ号に掲載した方が両者にとっていいと感じ、北沢さんにそうおねがいしました。

さあ、掲載となりましたが、生業の観光ガイド執筆が開店休業状態で国民年金受給者の私の場合、掲載料をどう捻出するかが問題でした。しかしながらこの世の中よくしたもので、救いの神様が降りてきたのです。そして私が仕事机の上に広げていた北沢さんからの手紙を読むよう、女房をいざなつたのです。

彼女は「原田さんが119枚も書いたそうじゃない。『ゆき』はどうしたの。続きを読む」と

いつてきました。なので「書いたとしても、とうげの旗に載せるには掲載料がいるんだぞ。100枚だったら3万円だぞ。おれは払えない」と応じると、「もし書いたら、私が払つてあげる」。（しめた！）でした。すぐさま全文をプリントアウトして、「ほい」と女房の目の前に差し出しました。

先に「なぜかストーリーがどんどん先につながつていきました」と書きましたが、今思えばそれは「ユキ」の続きの場面を頭の中でアニメーション化して文字にしていたからかもしれません。そして34年前には手元になかったパソコンは、その作業に最適のツールでした。

作者自身がアニメ的だと思っているので「文学賞」という言葉には戸惑うところがあります。文学的なのは冒頭の「爪先あがり」くらいかなと思つてます。そんな「ユキ」でもご評価ください、名誉あるとうげの旗児童文学賞をお与えくださいましたことに心より御礼を申し上げます。